

■山行年月日:2023年3月5日

■メンバー:堀江誠克、他1名(非会員)

プラザで仮眠し、3時起床4時出発。指導センターへ計画書を出して、暗い中アプローチする。先行は3パーティ、幽の沢方面、3スラ方面、そして我々と同じ一ノ沢方面へ向かっている。

一ノ沢に入り、トレースを追う。取付きがよくわからず、何度か枝沢に入り込んでロスする。シンセンのコルに近づいたころ、大きな氷瀑が右から落ちてきており、これが取付きである。風雪だが、雪崩の心配はなさそうだ。

続々と後続パーティがやってくるので急いで用意するも全パーティとも東尾根だった。緩傾斜で幅広く登りやすい氷壁だ。スクリューを打つ間も惜しんで、スピーディにロープを伸ばす。登るほど傾斜も強まり、ルンゼの幅も狭まる。核心はハングしたチムニー滝のはずだが、大半が雪に埋もれ、難なく通過。それよりも風雪がひどくて前を向いていられない。バラクラバもガチガチだ。スノーシャワーも厳しい。上部雪壁では微妙なモナカ状態の雪壁をだましだまし登る。ここからルートを手前を取ったが、正解は右だったようで、壁を抜け出したところは1・2の中間稜の手前のリッジ。終了点へは、微妙なトラバースを強いられた。稜線まで抜けて西黒尾根を下山予定だったが、風雪が激しいため、下ることにする。1・2の中間稜との間の

ルンゼ状を下ってみるが下るにつれて急傾斜となり、懸垂支点となる灌木もまばらとなってくる。吹雪で下の様子が見えない。3、4ピッチ降りたところで、一瞬視界が開け、下が見えた。今いるところは高さ数百mにもなる岩壁の上部でこの先は懸垂できるような木も生えていなさそうだ。ロープを抜いてしまえば進退極まる可能性もある。悪天候の中、早く下りたい気持ちを抑え、もう一度ロープを結びなおしてリードする。右上へ60m目いっぱい伸ばして尾根に乗ると、それが1・2の中間稜だった。あとは、既存ルートなので一安心。懸垂を繰り返し、ロープを外せるころまで来て振り返ると、下ろうとしたラインが見えた。やはり一ノ沢の右岩壁の真上まで来ていたようだ。そのまま下っていたら、生きて帰れなかったかもしれない。時間が迫り、疲労が溜まってくると自分に都合の良い情報しか入らなくなり、楽な方向へと希望的判断をしがちだ。ルンゼを下り始めた判断がまさにそうだった。だが、ギリギリのところ、危険を察知し冷静な判断と行動ができたのは、今まで厳しい状況をくぐりぬけてきた経験の蓄積が大きい。

そういった意味では悪天候やシビアなルートを経験することは、山で生き残っていくために必要なことなんだと、改めて思いながら下山した。